

北海道 苫小牧市

・調査項目

まちなか再生総合プロジェクトについて

・調査対応者

苫小牧市総合政策部 まちづくり推進室 主幹

主幹 武田 涼一

主査 小野 千玲

主事 吉田 南月

・調査期日

平成28年5月9日(月) 午後1時～午後2時頃

・苫小牧市の概要

人口：173,640人

世帯数：86,571世帯

・調査目的

苫小牧市総合計画にて掲げたまちづくり目標「活力ある産業と賑わいのまち」を実現するために計画されたCAP(まちなか再生総合プロジェクト)調査することにより、呉市の活性化へ反映する。

調査内容

苫小牧市の現状は、人口は約17万3,000人で、面積は561.57平方キロである。半分は山林で、市街地は十数キロメートルの横長のまちである。若い世代が多いということであるが、20年ほど前に大きな企業ができたことにより流入があり、若い世代が増えたということである。王子製紙やトヨタ、出光興産など、港を中心に工業の盛んな地域である。

東側には港を中心とした工業地帯、西側には居住区域と、職住分離政策を取っており、工業地帯の西側にある準工業地帯には、大規模な集客施設のイオン、ヤマダ電機、ニトリなどが進出しており、それに伴い、中心市街地にあった百貨店などの大型店舗が撤退した。

呉市を含め日本のまちは、車社会の進展を背景に、街が郊外へ拡大し、その結果、多くの市民の生活圏が中心から郊外へ移っている。平成11年に産業経済部門に中心市街地活性化対策室を設置し、中心市街地活性化計画を策定し、計画を推進していたが、思うような効果が出ず、衰退に歯止めがかからなかった。CAP(まちなか再生総合プロジェクト)としてはまずは反省点の考察から始め、前計画が上手くいかなかった原因として、1点目は、中心市街地イコール商業振興と考えすぎた点、2点目は、事業の実施時期や主体が不明確になっていた点、3点目は、計画が道路、

歩道、街頭などハード面を中心にした計画になっていたのではないかと、と過去の計画の反省を生かして取り組んだ点が現在の成功につながっていると思われる。

○まちなか再生総合プロジェクト事業の具体的な取り組みについて

・東胆振地域ブランド戦略事業

東胆振ということで苫小牧市の周辺1市4町の特産品を集めた「東胆振まるごとよくばり弁当」等、新たな特産品作り、平成22年には東胆振地域ブランド創造協議会を立ち上げ、戦略的な広域連携活動を行っている。

また、観光情報の発信ということで、「東胆振をおいしく旅する」という観光情報冊子等を作成しPRに取り組んでいる。

今後は、これらの活動を通じて、更なる地域全体の集客・交流の活性化に繋げていく予定である。

・まちなか交流センター

唯一市で整備する事業で、建物自体は民間の老人複合施設のテナントを一部借りて行っている。お茶を飲みながら本も読めるというコンセプトで計画し、まちなかの拠点として本が読め、人が集まる場所として平成26年からスタートをした。

駅前という立地条件から、学生が交通機関の待ち時間を利用して宿題をしたり、昼間は主婦達が集まっておしゃべりをしたりと、多様なコミュニケーションが創造される場所として、幅広い層の人たちが年間25万人を超える人たちが活用している。

・「まちなか交流館」連携事業

苫小牧信用金庫が地域貢献の一環として改築に合わせて「まちなか交流館」を建設し、市と連携してイベント等の事業を行っている。施設内では足湯や特産品の展示を行い、まちの中の憩いの場、交流の場として多くの人に利用される施設となっている。

・苫小牧市公式キャラクター“とまチョップ”PR事業

子どもの作った原案に基づいて、行政が3つの案を作り、市民投票により選ばれたキャラクターが「とまチョップ」である。苫小牧市の観光大使にも就任し、ブログやフェイスブックで活動を記載している。ゆるキャラグランプリにも参加し、全国で14位、北海道では1位であった。

また、着ぐるみはイベントへの貸し出しも行っており、様々なところで町おこしに貢献している。

・まちなか居住の推進事業

まちなかの居住人口の増加を図るため、日新団地という古い団地の立替にあわせて約120戸をまちなかに移した。また、まちなか居住支援を行う事業も合わせて行い、1棟4戸以上の建物を建てる際、1戸当たり100万円の補助を行っている。

まちなかに良質な住環境を提供することにより、まちなか居住を推し進め、効率的な都市運営を図っている。

・質疑応答

(質問) まちなか居住の推進事業での予算はいくらか

(回答) 工事費は約22億円です

(質問) ゆるキャラの市民の反応はどうか

(回答) 子どもたちを中心に人気があり、着ぐるみの貸出件数年々増えており、着実に定着しています。

(質問) 今後の展開はどう考えているか

(回答) 長期の目標はあるが、計画は毎年更新しているため、状況を見ながら随時変更し、市民のニーズに合ったものにしていく。

・呉市での展開の可能性

苫小牧市のまちなか再生総合プロジェクトは、スピード感をもって、様々な事業に着手しており、呉市でも取り入れることが可能な事業が多くある。しかし、そのまま呉市に取り入れても、必ず成功するとは限らないため、呉市バージョンに変換し、着手していく必要がある。共通していえることは、住民が自主的に外出する機会をいかに創出していくかが鍵であり、呉市の場合、駅前の店舗を利用し、市民が交流する機会の創出を図ることにより、呉市の活性化事業の1つとして利用できるのではないかと思う。

北海道 小樽市

・調査項目

福祉コミュニケーション都市推進事業について

・調査対応者

小樽市高齢者懇談会「杜のつどい」

会長 大橋 一弘

副会長 釜野 春代

小樽市福祉部地域福祉課

主査 大口 明男

・調査期日

平成28年5月10日（火）午後1時30分～午後2時30分頃

・小樽市の概要

人口：124,122人

世帯数：65,561世帯

・調査目的

「杜のつどい」の事業は「福祉コミュニティ都市・小樽」を目指して創設され、高齢者が生きがいを持ち、元気に暮らせるまちづくりについて考える集まりである。これらを調査することにより、呉市においても高齢者の生きがい、賑わいの創出を目指す。

・調査内容

「杜のつどい」は、自ら生きがい・にぎわい・健康・情報・ビジネスの場を創出することにより、まちに出かけるきっかけづくり等を行っている。

小樽市としては、平成17年4月から、社会実験として、小樽市高齢者懇談会「杜のつどい」の活動をサポートし、平成17年6月に「杜のつどい」の活動拠点として産業会館1階を無償の貸し出しと年間30万円の委託料の支払い以外は行っていない。

「杜のつどい」の会員数は約700名でその8割が女性。講座開設数は76講座と多種多彩であり、述べ参加数は20,000人を超え、大盛況である。

運営については、個人からの年会費（新規会員 2,000円 継続会員 1,000円）と講座の受講料、数百円で賄われており、小樽市からは年間30万円の委託料以外は受け取っていない。

実際の視察を受けた場所は、講座「語ろう会」の隣であった。会員の方々の活発な議論、市政に対する意見交換等、多様な内容の議論を1時間以上行っている姿はとても元気で、生き生きしておられた。

・質疑応答

(質問) 女性が多いが、男性の会員は勧誘しないのか

(回答) 男性会員はなかなか増えない、奥さんに連れられてこられることもあるが、増やすことは難しい。

(質問) 会長の後継者はいるのか

(回答) 後継者の育成を含め、人材の確保は現在行っている。

(質問) 会員の増加は見込んでいるか

(回答) 会員数はこれ以上増えると管理できない、現在の数がスタッフの管理できる限界である。

・呉市での展開の可能性

呉市においては、老人クラブ等、同様な組織は存在するが、運営自体は市からの補助金ありきであり、また、会員が全員で一緒に活動を行っているなど、「杜のつどい」との活動内容は大きく違っている。

「杜のつどい」は自ら講座を選び、受講料の数百円を払い参加し、さらには、会員が新規講座の提案ができるなど、老人クラブの活動とは大きく異なる。

呉市でも、自らが考え、行動できるよう選択肢の広い、きっかけを準備することにより、もっと自主的な団体のサポートを行っていく必要があるのではないかと思われる。

北海道 余市町

・調査項目

ニッカウヰスキー 余市蒸留所 施設見学

・調査期日

平成28年5月11日（月）午前10時～

・調査目的

年間80万人を超える施設を視察することにより、呉市においても同様の賑わいの創出を目指す。

・調査内容

ニッカウヰスキー余市蒸留所は、1934年（昭和9年）に竹鶴政孝によって設立され、ニッカウヰスキーの聖地として竹鶴の夢と情熱をいまだに受け継ぎ、現在も重厚で力強い余市モルトを作り続けている。

施設内は、実際の作業を行っているため立ち入り禁止区域もあるが、ウヰスキーの製造過程のほぼすべてを見学することができる。

また、施設内にはウヰスキー博物館もあり、実際に使われている樽や道具が展示されているほか、有料の試飲コーナーやテレビドラマで使われた衣装など、幅広い展示品がある。

施設は通常見るだけであるが、こちらの施設の中は、木やウヰスキーの香りなどが特に印象的であった。

施設内は基本すべて無料で見学、試飲等ができ、平日の昼間にも関わらず、多くの人々が訪れていた。

・呉市での展開の可能性

呉市にも、上記の施設程大きくはないが、日本酒などの工場見学が行える施設があり、また全国的に有名な銘柄のお酒もある。大和ミュージアム等の施設と連携し、呉市に観光でこられた人々が周遊できるようなコースの作成・取り組みの参考にしていきたいと思う。